

2025年度大学入試結果の概況と 26年度大学入試に向けた指導のポイント

現行の学習指導要領に対応した入試として初めて実施された25年度大学入試。その結果の概況とともに、近年の入試環境の変化や全国的な調査結果を基にした、26年度大学入試に向けたポイントや校内体制のあり方などを確認する。

2025年度大学入試結果の概況

総合型・学校推薦型選抜の 入学者が増加

2025年度大学入試では、特異的に18歳人口が増加したが、長期的に見れば18歳人口は減少が続く。志願者数と入学者数の差はかなり縮まっており、今後も入試競争の緩和が進む。

近年は総合型・学校推薦型選抜の入学者割合が増加を続け、24年度入試においては51・8%と、半数を超える状況が続いている。一般選抜の募集人員は減少が続く、一般選抜と総合型・学校推薦型選抜の両方を視野に入れた出願戦略の重要性がますます高まっている。

国公立大学では一般選抜の 志願者数が回復

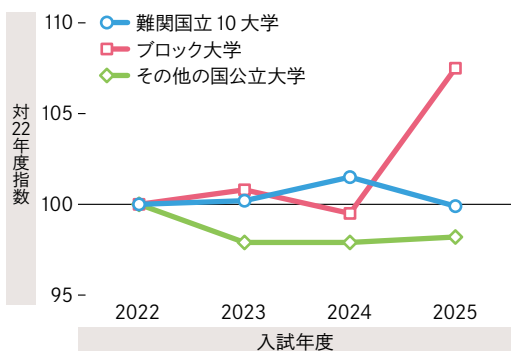
近年、国公立大学全体の一般選抜の志願者数は減少傾向にあったが、25年度入試では、対前年指数101とやや増加した(図1)。

特に公立大学全体の志願者数は、対前年指数104と増加した。現行の学習指導要領に対応した大学入学共通テスト(以下、共通テスト)に対する受験生の負担感が増す中で、公立大学には国立大学よりも共通テストの教科・科目数が少ない募集単位があることが影響していると考えられる。

図1 国公立大学の一般選抜の志願者数の推移

	2024年度 志願者数	2025年度 志願者数	対前年 指数
国立大学	299,715	299,739	100
公立大学	123,545	128,762	104
国公立大学	423,260	428,501	101

図2 大学群別の一般選抜の志願者数の推移



※数値は2022年度の人数を100とした時の数値。

	2024年度	2025年度	対前年 指数
難関国立10大学	71,564	70,470	98
ブロック大学	68,255	73,697	108
その他の国公立大学	283,441	284,334	100

難関国立10大学(*1)においては、模擬試験や大学入学共通テスト自己採点集計サービスの動向で強気の志望が見られていたが、最終的には落ち着き、全体の志願者数は対前年指数98となった(図2)。一方、ブロック大学全体(*

2)の志願者数は、対前年指数108と増加した。学部系統別に見ると、国公立大学の語学、国際関係学系統は対前年指数106と2年連続で増加し、薬学系統は2年連続で減少した。長らく志願者数の減少が

続いてきた教員養成・教育学系統は対前年指数101と前年並だった。

私立大学では共通テスト方式でチャンスが拡大

25年度入試の私立大学全体の一般選抜の志願者数は対前年指数105と増加したが、合格者数は対前年指数96と減少し、倍率で見ると厳しい入試だった(図3)。

ただし、方式別に志願者数と合格者数の推移を分析すると状況が異なる。共通テストを課す方式では、志願者数・合格者数ともに増加。共通テストが導入された21年度入試以降、私立大学専願者には共通テストを避ける傾向が見られていたが、共通テストを課す方式で合格率の上昇が続いたことを受けて、共通テストを課す方式の志願者数が回復傾向にある。MARCH(*3)文系の共通テストを課す方式の合格率の推移を見ると、偏差値60台前半の合格率は21年度入試以降35%前後まで上昇している(図4)。

また、私立大学では文系の学部系統の人氣が回復した。例えば、法学系統が対前年指数111、経済・経営・商学系統が対前年指数107と増加した。

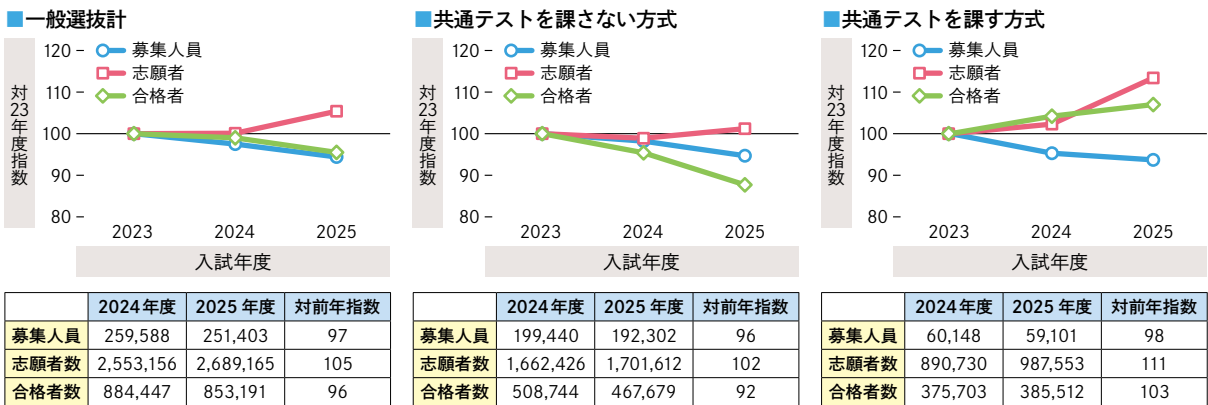
年内入試は募集人員、志願者数、合格者数がいずれも増加

25年度入試では、総合型・学校推薦型選抜の募集人員、志願者数、合格者数がいずれも増加し、特に私立大学では、志願者数の増加が顕著だった(図5)。

国立大学においては一般選抜の合格者数がやや減少したこともあり、合格者数全体に占める総合型・学校推薦型選抜の合格者数の割合は20.4%と、前年から約1ポイント上昇した。

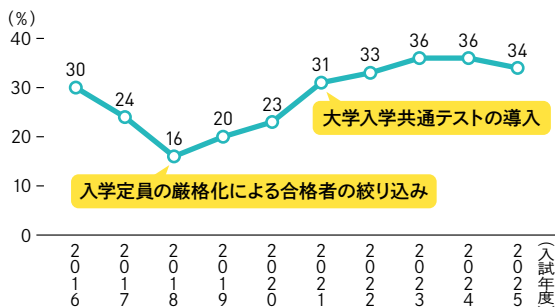
25年度入試の国立大学の総合型・学校推薦型選抜の募集人員に対する合格者数、すなわち充足率は、医学、歯学、理学、工学、農・水産学系統などで低かった。募集人員の多い工学系統では、総合型・学校推薦型選抜の募集人員(6805人)に対し、合格者数は6282人とどまった。その差の約500人は、一般選抜の募集人員などに充当されたと考えられる。それらの学部系統では、大学の合格基準を満たせば他の受験生と競争することなく、総合型・学校推薦型選抜で合格できた可能性がある。今後も同様の傾向となるとは限らないが、国立大学の理系学部志望であれば、総合型・学校推薦型選抜への出願も検討したい。

図3 私立大学の志願者数・合格者数の推移



※2025年5月中旬までに収集できた情報を基に作成。 ※折れ線グラフの数値は、2023年度を100とした時の指数。

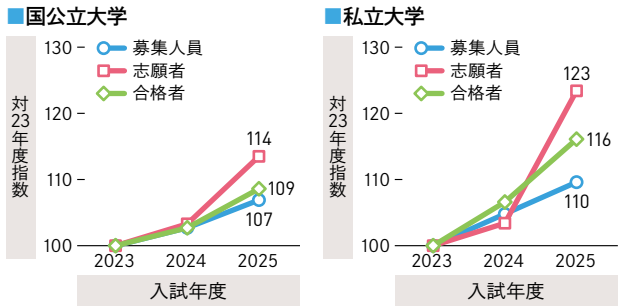
図4 MARCH・文系・共通テストを課す方式の合格率の推移(偏差値60台前半)



※入試結果調査より。偏差値は進研模試「大学入学共通テスト模試・6月」及び「第1回ベネッセ・駿台大学入学共通テスト模試」のもの。

*3 明治大学、青山学院大学、立教大学、中央大学、法政大学。

図5 総合型・学校推薦型選抜の募集人員、志願者数、合格者数の推移



※2025年5月中旬までに収集できた情報を基に作成。 ※数値は2023年度を100とした時の指数。

*1 北海道大学、東北大学、東京科学大学、東京大学、

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

26年度大学入試に向けた指導のポイント

共通テスト対策を

組織的に進める高校が好結果

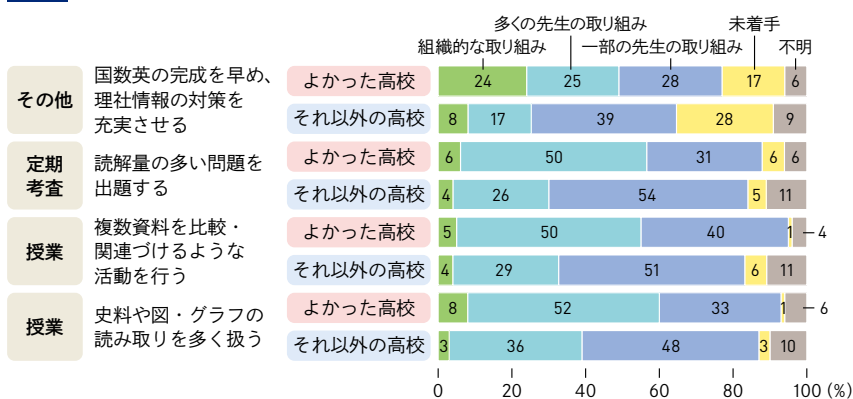
25年3月、ベネッセ教育情報センターは、全国の高校教師を対象に、新課程及び教育活動全般に関する調査を実施した。共通テスト対策として取り組んできたことのうち、共通テストの結果がよかったと回答した高校と、それ以外と回答した高校で差がかった取り組みを分析した(図6)。

その結果、「国数英の完成を早め、理社情報の対策を充実させる」「読解量の多い問題を出题する」「複数資料を比較・関連づけるような活動を行う」などの取り組みを、組織的に進めている、または多くの先生が進めている高校の多くが、共通テストの結果がよかった。

現行の学習指導要領に対応した入試の2年目となる26年度入試は、多くの受験生が新しい形式の出題に慣れてくることから、25年度よりも各大学が求める共通テストの得点の水準が上がると予想される。難化の可能性が高く、入念な準備が求められる。

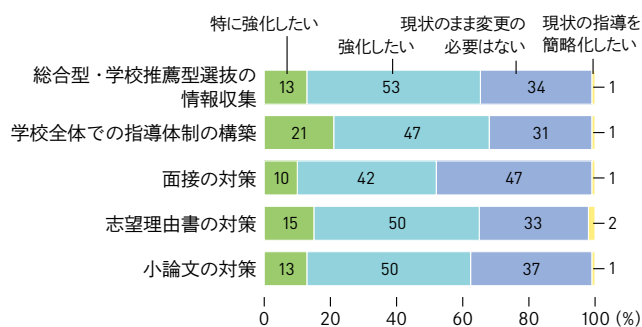
なお、26年度の共通テストからは出願が電子化される。教師が生徒の出願内容を確認するには、出願時に生徒が同意していることが必要な点に注意したい。

図6 共通テスト対策として取り組んできたこと(共通テストの結果認識別)



※ 2025年度新課程及び教育活動全般に関する調査より(抜粋)。
 ※ 共通テストの志願者がいたと回答した574校のデータを集計。

図7 総合型・学校推薦型選抜に向けた指導で今後力を入れて取り組みたいこと



※ 2025年度新課程及び教育活動全般に関する調査より(抜粋)。
 ※ 数値は調査の有効回収数(734校)に対する割合。

図8 総合型・学校推薦型選抜の指導負担軽減のために取り組んでいること

取り組み	(%)
【指導の外注化】小論文や志望理由書の添削サービスの利用	32
【本格的な指導前の底上げ】低学年時から志望理由を練らせる	25
【本格的な指導前の底上げ】低学年時から小論文の対応力を養成する	21
【指導ノウハウの確立】小論文指導の教員研修の実施	18
【指導方法の工夫】同じ系統の志望校の生徒をグループ単位で指導する	18
【本格的な指導前の底上げ】低学年時から表現力を養成する	15

※ 2025年度新課程及び教育活動全般に関する調査より(抜粋)。
 ※ 数値は調査の有効回収数(734校)に対する割合。

年内入試指導のノウハウを校内全体に広げる必要性が高まる

同調査において、総合型・学校推薦型選抜に向けた指導で今後力を入れて取り組みたいことを尋ねたところ、「特に強化したい」と回答した割合が最も高かったのが「学校全体での指導体制の構築」だった(図7)。

その背景には、総合型・学校推薦型選抜を受験する生徒が年々増加する中、一部の教師のみに年内入試の指導を委ねる従来の体制では十分に対応し切れ

なくなってきたという現状がある。

同調査では、年内入試における指導負担の軽減に向けた取り組みについても尋ねた(図8)。その結果、「小論文や志望理由書の添削サービスの利用」といった指導の外注化や、3年次の本格的な指導前の小論文や志望理由書の対応力の底上げが主な取り組みとして挙げられた。また、「小論文指導の教員研修の実施」など、校内における指導体制の整備も重視されていた。年内入試指導の負担軽減のためにも、組織的な指導体制の構築が急務となっている。

一般選抜と年内入試の両にらみが求められる

2025年度入試は、いわゆる「新課程初年度入試」として、大学入学共通テスト（以下、共通テスト）では、新教科の導入、科目構成や出題形式の変更、試験時間の増加など、多くの変化がありました。問題作成方針に沿った出題がなされ、6教科1000点集計の予想平均点が文系・理系ともに上昇したことを踏まえると、変更点は多かったものの、生徒は新しい形式にうまく対応できたと見ています。

国公立大学では、模擬試験等の動向で見られていた難関国立10大学における強気の志望は、共通テストの平均点アップにもかかわらず、出願には反映されませんでした。一方、アラカルト型が多い公立大学では、志願者数が増加しており、共通テストの負担感を避ける傾向がうかがえます。私立大学では、共通テストを課す方式における志願者数・合格者数がともに増加しており、存在感が増しています。これからの私立大学入試では、国公立大学併願層向けの多教科共通テスト利用型、私立大学専願層向けのアラカルト型、年内入試の学力重視型、年内入試の多面的評価型の4類型がスタンダードとなっていくそうです。

総合型・学校推薦型選抜については、募集人員、志願者数、合格者数はいずれも増加しており、受験規模が拡大し続けています。同選抜による入学者は、2024年度入試の段階で過半数を超え（51.8%、文部科学省「国公立大学入学者選抜実施状況」より）、一般選抜と年内入試は、「一般選抜での合格が難しい生徒は年内入試の利用を考える」という関係性から「一

般選抜と年内入試の両方を視野に入れた指導計画を立てる」という関係性へと変わりつつあります。それは、25年3月に弊社が行った高校教師向けアンケートにおいて、総合型・学校推薦型選抜に向けた指導で今後特に強化したいこととして「学校全体での指導體制の構築」が最も多く挙げられたことからうかがえます。

では、一般選抜と年内入試の両方を視野に入れた指導體制とはどのようなものなのでしょうか。体制が確立できている先進校の取り組みに共通していたのは、「育成」と「見極め」という2つの点でした。

「育成」とは、「総合的な探究の時間」、ホームルーム活動、学校行事などの諸活動を生徒のキャリア観に結びつけ、志望理由として外化（書く、話す、発表する）させることで、「見極め」とは、志望理由を多様な観点で検討し、各大学や募集単位との親和性を判断することです。「一般選抜と年内入試の両方を視野に入れた指導體制」のノウハウは今後も全国の学校で生まれることと思います。教育情報センターでは積極的にそうした情報を収集し、継続的に先生方にご提供して参ります。



(株)ベネッセコーポレーション
学校カンパニー 教育情報センター長
日山敦司 ひやま・あつし

2025年度ベネッセ教育情報センター主催のWEBセミナーアーカイブのご案内

◎新課程一期生総括を踏まえた新課程二期生のための共通テスト対策

対象 3学年ご担当各教科先生

概要 各教科の新課程初年度の共通テスト分析と教科指導の実践事例のご発表

リンク <https://benesse-hs.jp/2kpeb>



◎出願指導研究会

対象 進路ご担当先生、3学年の担任先生

概要 2025年度入試結果のデータ分析と2026年度入試の出願指導のポイント整理

リンク <https://benesse-hs.jp/evmag>



◎年内入試5割超時代を踏まえた一般・推薦総合 両にらみの低学年指導

対象 1学年・2学年主任先生、進路ご担当先生、探究ご担当先生

概要 低学年から推薦・総合と一般選抜を両にらみで指導するポイントと探究と進路をつなげる実践事例のご発表

リンク <https://benesse-hs.jp/cjt59>

